金城繁子（昭和 10 年 7 月 9 日生）手記：
南洋サイパン 1944 年 6 月 太平洋戦争

昭和 19 年、私達家族は、南洋サイパン南ガラバン町グワロライに住んでいました。当時私は第二国民学校 3 年生になったばかり、校舎は日本兵が使用して、私達は木陰で勉強していました。

6 月 10 日頃突然、町内係のおじさんが“空襲警報発令”と大きな声でさげびながら自転車に乗って通りすぎて行った。お隣もおどろいて、“みんな早く、早く”といいながら隣組で掘った防空壕へと避難したが、夕方になると、近くで、ドカン、ドカンとバクダンの音がして、みんなおびえていた。近くには、高射砲の陣地があって、そこをめがけての攻撃らしい。組長さんに“ここは危険だ、もっと安全な場所に行くがよい”といわれました。暗くなってから、父は食糧や衣類等をまとめ牛車に引かせて叔父夫婦がコーヒー作りをしていた山（タッポーチョ）へ行きました。荷物は叔父夫婦の家に置き、いっしょに奥山にある自然ガマへ避難しました。

2 日後、暗くなってから、計助兄さんと計房兄さん二人で食糧を取りに山から下りてみると、叔父の家は焼かれ荷物も全部やかれ、兄さん二人、がっくりして帰ってきました。お腹をすかせて待っていた私と妹の道代と房江の 3 名は、ショックで泣きました。この場所もあぶないと父が言って、暗くなるのを待って叔父夫婦と私達家族（父、母、兄二人、妹三人そして私）8 名、さらに安全な所へと移動、昼間は戦闘がはげしいので岩陰にかくれじっとしている、暗くなると行動するので、どこからともなくおおぜいの人が、あつまり、どこが安全なのか、さまよっていた。おなかはずくし、のどはかわくし、家族の話もだんだんすくなくなっていて、その苦しさは忘れる事ができない。ドンニイもすぎたころ、どこではぐれたのか叔父夫婦の姿が見えなくなっていた。

6 月 21 日頃、やっと自然ガマのあるところまでたどりついた。空腹とつかれのため、みんな歩けなくなっていた。4 ヶ月の赤ちゃん（絹子）は、おっばいの出ない母にだかれ一生懸命オッパイを吸う姿が忘れられない。お父さんも、つかれきっていた。“飢え死にしてもよい、ここをはなれないで

おこう”と父はいった。幸いにも、近くにサトウキビ畑があったので、飢えをしのいだが、翌日、うす暗くなってから二人の日本の兵隊さんがきて、“水はないか！”といい、妹たちの大事な水はとられ、サトウキビまで全部たべられてしまった。あの時父はたいへんおこっていたが、どうすることも出来ませんでした。あげくは、生後4ヶ月の妹、きぬちゃん、が泣きだしたので、“めいわくだ、首をしめて殺せ、殺せないのか！”と母の顔面をなぐりながら“ここを出て行け！”とどなった。

私達は仕方なくこのガマを出た。さまよいあるいて、2、30分たったであろう、照明弾が上がり、あたりは真昼のような明るさになった、と大きな音とともに炸裂する砲弾、後にいた母が、“きぬちゃん！きぬちゃん！”と泣き叫んだ。生後4ヶ月の赤ちゃんの後頭部に砲弾の破片がささり、即死状態で、ぐったりしていた。この時に、道代ちゃんの右ほほにも、そして父の額にもそれぞれ小さな破片が突き刺さって傷を負ったが、きぬちゃんの事で、自分たちの傷に気が付いたのは、ずっと後でした。そこにはたくさんの人の、暗闇の中からの、“助けて！助けて！”とさけぶ声。子供の名前を呼び続ける親、そして女の声で、“お母さん、がんばって、お母さん、がんばって！”と泣き叫ぶ声。ここは、まったく、地獄で苦しんでいるような有様。母は、動かなくなった妹きぬちゃんをだいて家族8人と座っていた。だんだんつめたくなっていく妹、いっしょに死にたかった。木の下にそのまま寝かせた妹きぬちゃんをひとりだけ残していくのは、胸がはりさけそうだ。家族いっしょに天国に行きたい。“絹ちゃん、先に天国でまっててね”と、手を合わせ、死ぬ場所をさがしてあるきはじめた。

先日の砲弾で、重傷を負った日本兵が、あまりの苦しさに、舌を切り、死にきれず、ゲートルをはずして、首をしめてくれと祈るように弱々しい声で言う。父は、彼のゲートルをはずしたが、首をしめることは出来ず、“ごめんなさい”と言った。歩いているうち、三男、計助兄の、同級生にあった。手は肉がはじけ、足は破片が貫通して、低い木の枝に手も足もゆわいつけられ、止血のためかわからないけど、寝かされていた。その近くに、蒼白い顔のかわいい赤ちゃんが、無傷なのに死んでいた。顔に4、5匹のありがとうようよしていた。あの時のことが、今もはっきり目に浮かぶ。

どこからか、人間が腐ったにおい。母の洋服は、きぬちゃんの血がくさくなっていた。あちらこちらに、ころがっている死体の横にあるフロシキづつみを取り、“貸してください”と手をあわせ、洋服をきがえた。洋服が大きかったので、ベルトがわりにフロシキをつかった。サトウキビ畑は、全て焼かれ、飢えをしのぐキビもなく、一滴の水もなく、次女の妹、道代ちゃんは、“水、水が欲しい、水が”、と泣いてばかり。母は、衰弱しているからだから乳を必死になってしぼり、一滴出るとなめさせ、父は、自分の小便を茶わんにだして、“ハイ、水だよ”と飲ませた。

7月の中頃、絶好の死に場所、カナベラ海岸まできていた。そこも自然ガマがあり、たくさんの日本兵や、避難民の死体が腐乱はじめていた。大きな銀バエがたくさんぶんぶん飛んでこわかった。ガマの中をのぞくと、足をけがしてあるけなない日本兵がいた。また怒鳴られないかと、立ち去ろうとすると、“水はないか？”と聞かれ、“もってないです”と言うと、アメリカは、女、子供は殺さないから水をさがしてこいといわれた。私と母は、ハンゴーと水筒をもって出た。もちろん、水なんてあるはずがない。岩のくぼみにたまった海水をさがしに出た。夕方4時頃である。約10分くらい歩いていると、左の方向から銃声がきこえた。“こわいよ”といいながら、小さい木がはえ茂っている所を、私が前、母が後ろで急ぎ足で、道もない所をさまよっていた時、米兵の声が、ペラペラペラと、聞こえた。その時、米兵は、私を銃で撃った！左ももと、右の人差し指、中指、くすり指の3本をもぎとられた。アッというまの出来事で、痛くもない、ただこわくて、ブルブル震えて、私は後ろをふりむき、“お母さん、手が、手が、”と言った。お母さんはびっくりして、“どうして子供に？”といいながら、母は洋服のバンドがわりのフロシキで手を巻いてくれた。“自分にあたればよかったのに”と涙をながした。私は涙も出ない。痛いとも、一言もいわず、水筒とはんごうをそのばに捨てて、お父さんがまっているガマに戻った。日本兵は私の赤く血にそまった手をみて、なにもいわなかった。

私達家族は、一緒に死ねる場所へと又あるきはじめた。何時間あるいただろう、その深海にたどりついた。このカナベラ海岸は、針のような鋭い岩

石ばかりで、水際は、すぐ深い海になっていた。そこで、たくさんの方が、自殺したのがすぐわかった。髪の高い女性、小さい子供達が浮いていた。なにもこわくはなかった。父が、“さあ、きぬちゃんがまっている天国に行くんだ”と手をあわせた。みんなも手をあわせた。父は、三女の顔、次女、私、お母さん、最後に二人の兄をみつめて、“さあ、飛び込め！”というかと思ったら、何を考えたのか、“まて！”といわれた。15才の兄、13才の兄が泳げるのに気付く、海に飛び込んでも死にきれず、二人後にのこされたら、どうしようと言う。明日までまとう、又明日までまとう、と岩場に小さいカニや、動く物をつかまえてたべ、岩のくぼみに身をひそめていた。私の手は、海水で洗ったの治療、それでもだんだんくさくなって、大きな銀バエがあつまる。替える包帯もなく、血でよごれたふろしきには、小さい虫がうようよししている。痛みははげしくなるばかり。死にたいけど、父も母もゆるしてくれない。

人間の運命か、宿命か、不思議なもの。父の命令で、明日まで、又明日まで、と一日一日を生き延び、7、8日は過ぎたであろう。夜明け、突然目の前に立っている大きい人！ とっさのことで、死ぬ余裕さえなかった。13才の兄、計房は、すばやく海に飛び込んだが、波に寄せられ、必死に逃げた。裸足で。岩石が足に刺さり、歩けなくなった所を、米兵につかまった。妹には、先に天国でまわっていてねと家族でちかったのに、本当にすまない。胸が痛む。毎日妹、きぬちゃんの顔が目にかぶ。

こうしている間、次男の兄、計正は、沖縄の工業学校を卒業して帰る予定だったのに、沖縄戦で戦死した。今は、建児の塔にまつられている。長男の兄、計彦は、終戦後復員したが、すぐに病死した。

お母さんは、終戦になっても、前向きになれず、鬱病になってしまい、毎日、“死にたい、死にたい”と家族を困らせた。あの時、9才になったばかりの私に、生き残った喜びはすこしもなかった。戦争とは、人間を狂わせてしまう。二度とあの悲しい、苦しい、戦争はあってはいけないと思う。人々が平和に暮らせる様、みんなでお祈りしましょう。